

国際開発プランニングコンテスト2009

活動報告書



idpc

international
development
planning
contest

2009

2009.2.16-18

国立オリンピック記念青少年総合センター

はじめに

2000年、ニューヨークの国連本部では189の加盟国代表が、開発や貧困などの課題を掲げ、国際社会が達成すべき「ミレニアム開発目標 (MDGs)」を定めました。昨年国連が発行した「ミレニアム開発目標報告2008」によれば、その一部の目標においては、期限とした2015年までに達成の見込みであると報告されています。しかし、達成困難と思われる目標も少なくなく、国際社会は今もなお多くの課題を抱えています。さらに、食料安全保障や地球温暖化、経済危機など新たな課題も現れ、これらが貧困層に与える影響が心配されています。グローバル化により小さくなった世界の中で、全ての国々は、自国の活動が世界へ与える影響を考えずにはいられません。

特に日本ほどの大国になれば、その影響力は非常に大きなものとなります。国内には、視野を世界に向けた若者はたくさんおり、そしてその多くが「途上国のために何か役に立ちたい」と強く願っています。しかし今の日本には、彼らの芽を摘んでしまうのに十分な理由が数多く存在します。政府開発援助 (ODA) は年々削減され、NPO職員の待遇は決して恵まれたものではありません。また海外でボランティアをしたいと思っても、大学卒業後すぐに就職し企業に勤務し続ける、というルールを外れることには強い不安があります。このような中、国際開発への情熱を持つ若者を支援し、彼らの可能性を広げることは非常に価値の高いことだと考えます。

国際開発プランニングコンテスト (以下、idpc) 2009にはまさしく国際開発への情熱を持つ47名の参加者が集まりました。この中から、将来、国際開発の分野で活躍するような人材が生まれることを強く信じております。彼らがidpc2009から何かを得、それを糧として今後の人生に活かしてくれるのならば、主催者としてこれほど嬉しいことはありません。

idpc2009を開催するにあたり、実に多くの方々にご協力頂きました。目標を持ち努力する若者を応援してくれる人々が、社会にはこんなにも多くいるのかと感謝せずにはいられない一年間でした。皆様のご期待に応えるべく、今後も活動を継続し、idpc自身もさらなる発展を目指す所存です。引き続き皆様方の御協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

国際開発プランニングコンテスト実行委員会 代表
東京大学大学院 新領域創成科学研究科 国際協力学専攻 修士課程

真鍋 希代嗣

目次

CONTENTS

I 概要

1 実施概要	1
日程、場所、参加人数など	
2 企画の趣旨	2
コンテスト全体を通して/ケースの意図/審査基準	

II 当日

1 参加者の傾向	3
参加者の専攻分野、在籍大学、学年	
2 全体スケジュール	4
コンテスト当日の流れ	
3 プランニング	5
プランニング/中間発表/最終発表(審査員紹介)	
4 プラン紹介	6
プラン概要、チーム名、メンバー名など	
5 講演・講座	8
講義概要、講師紹介、参加者の声	
6 その他のコンテンツ	10
開会式/アイスブレイク/目標設定/テーマ別座談会/ 結果発表/フィードバック/Speaker's Corner/閉会式	
7 アンケート分析	12
各コンテンツ/プランニング/主旨・目的/全体	

III 運営

1 主催団体	13
組織概要/一年間の活動/スタッフ	
2 活動詳細	14
理念・目的の共有/定期ミーティング/模擬コンテスト/協賛活動/ ケース課題作成/広報活動/勉強会	
3 決算報告	16
決算報告	
4 協賛・協力	17
協賛/物品協賛/協力/後援/メッセージ/Special Thanks	

1 開催概要

国際開発プランニングコンテスト(以下idpc) 2009は下記の要領で開催した。

日時	2009年2月16日(月)～18日(水)(2泊3日)
場所	国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区)
対象	将来、国際開発分野で働きたいと考えている全ての人
参加人数	47名(応募者84名)
参加費	9000円/人(宿泊費・食事代込み)
主催	国際開発プランニングコンテスト実行委員会



2 企画の趣旨

● コンテスト全体を通して

対象者 初学者から一歩進んだ層、学部3、4年生や大学院生、また社会人を主たる対象とした。それは、この層を対象者とした国際協力イベントがほとんど存在しないからである。一部、存在するものに関しては、開発のセクターごとに細分化された内容のみを扱うものであったり、「国連機関で就職するためには」など、実践的なテクニックのみを教授するようなイベントが多い。専門分化しつつあるこの層が、様々なバックグラウンドを持ったほかの参加者と交わり、実践的な開発課題に向き合うことに、新しい価値の創出の可能性を感じた。

提供する場 参加者が国際開発の分野で羽ばたくうえで、大きなステップとなるよう、idpcでは3つの場を用意した。



(1) 国際開発に必要な知識・スキルを身につける「場」
国際開発の分野で活躍するために必要な知識・スキルを身につけることが、idpc2009の最大の目的である。国際開発分野でプロフェッショナルとして活躍するために必要なものは幅広い。語学力や専門知識は当たり前のこと、論理的思考力やコミュニケーション能力など総合的な能力も必要とされる。idpc2009では特に、論理的思考力とコミュニケーション能力をテーマとして掲げた。

(2) 国際開発分野を担う次世代の人材と知り合う「場」
どんな分野でも、いざと言うときに助けになるのは人脈であり、それは国際開発の分野でも同じである。idpcでは、こうした横につながるきっかけを提供する。将来、仕事をする際に、「〇〇については、idpcで一緒の班だったあいつに聞こう」というようなつながりが生まれて来ることが、idpcがめざすところである。

(3) 国際機関やNGOなどと参加者のマッチングの「場」
国際開発分野に将来にわたって関わってほしいとする優秀な人材が、2泊3日、しかも50人もの規模でひとつの場に集まることはあまりないことである。国際機関やNGOの方々には、スタッフやインターンのリクルーティングの場として活用していただいた。従来のような簡単な採用面接ではなく、参加者のディスカッションの様子を見ることで、多面的に候補者の能力を判断していただくことができる場となった。

● ケースの意図

自分の頭で考える 今回、開発分野ですでに確立したツールの紹介や過去の事例紹介などは行わなかった。それは、目の前にある開発課題を、他ならぬ「自分の頭」を使って解決することの重要性を感じたからである。ツールのあてはめや過去の事例探しでは、解決しない問題が必ずある。そしてそれは当然、無知である私たちが、ツールや事例を勉強して、ミニ国連職員やちっちゃな開発コンサルタントになっても絶対に解決しない問題である。しかし逆に「知らないこと」を武器に、自由闊達なディスカッションをすることで、その問題解決に近づくことができるのではないか、という淡い期待があった。学生である私たちだからこそ出せる価値はそこにある。

限られたリソースで プラン策定にあたり、使用できるリソースを制限したのは、限られたモノをやりくりし、効果を最大化しようとするを学んでもらうためであった。十二分にものが揃っている環境でできることと、そうでない場合にできることは大きく異なる。優先順位の設定をしたことも、少ないリソースを有効活用するためである。すべての問題を解決できることが最善であるかもしれない。しかし、それは多くの場合現実的ではない。

英語 なお、ケースレポートは英語を用いて作成した。国際開発分野で活躍するためには、英語は最低条件である、ということが、そこにこめられたメッセージである。

● 審査基準

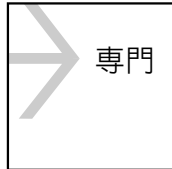
評価軸は「論理性」「わかりやすさ」「インパクトの大きさ」「斬新さ」の4つを設けた。今回のテーマとした論理的思考力、コミュニケーション能力(特にプレゼンテーション能力)を評価するため、はじめの2項目は、「問題分析とプランの論理的整合性」、そして「わかりやすさ」とした。「わかりやすさ」とは、今回のプレゼンテーションを、IT企業の社長に対して行うとケース内で設定したため、その彼にとってのわかりやすさ、である。3つ目の評価軸は、策定したプランの「インパクトの大きさ」である。コミュニ

ティに与えるインパクトとひとことで言っても幅広いが、経済的な側面、医学的な側面などあらゆる側面を鑑みて、審査員の方には判断していただいた。最後の評価軸は、「斬新さ」とした。学生が中心となって策定したプランであるため、学生でないと発揮できない価値を評価していただいた。逆に、プロジェクトのフィジビリティやマーケティングに関しては、審査においてあまり重要視しなかった。なお、発表時間には時間制限を設け、時間超過に関しては、1秒につき得点の0.15%を減じた。

(井上)

1 参加者の傾向

このセクションでは、専攻分野、大学、学年、などといった基本データを基に、idpc2009参加者の特徴や傾向を述べる。



専門

参加者の専門分野に関しては、国際教養、医療、保健看護、といった国際開発に馴染みのある分野から、文学、理工、建築、といったその他の分野まで多岐にわたる。しかし、参加者の大多数が、NGOでのボランティア、ワークショップ、勉強会、など国際協力関係の活動に従事した経験があり、国際協力に対する熱い思い、という点では全参加者を通じて共通している。



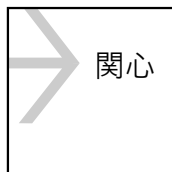
学年

1名の社会人を除き、参加者は大学1年生から修士2年生までの大学・大学院生で構成されている。学年別に見ると、最も参加者が多いのは大学2年生であり、全参加者の約4分の1を占める。本コンテスト開催が就職活動で多忙な時期と重なっているにも関わらず、大学3年生、修士1年生は合わせて全体の約3分の1を占めた。



地域

コンテストの開催地が東京であることから、参加者の多くは関東近辺の大学・大学院生である(※)。しかし、関西や九州からの参加者も非常に多く、全体の約3割は関東圏以外の遠隔地から足を運んでおり、参加者の意欲・意識の高さが窺える。



関心

「国際開発」と一言で言ってもさまざまな分野があるため、どのような分野に興味があるのか尋ねた結果、特に多かったのが「経済」と「環境問題」で、合わせて全体の約4割が関心を寄せていることが分かった。この傾向の背景としては、昨年からの金融危機が世間を騒がせていることや、近年環境問題が盛んに謳われていることが考えられる。しかし一般的にこれらの問題は規模が大きく、リアリティや関心を持ちにくいものが多い。そのことから、このような問題にもアンテナを張ることができる参加者の長期的かつグローバルに物事を捉えられる視野の表れ、とも解釈できる。



総括

各参加者の本コンテストに求めるものや志望動機は、「交流」、「スキルアップ」、「視野の拡大」など実に様々であるが、それぞれはっきり目的意識を持っている。このほか、はるばる遠方からの参加、また全体の1割弱ではあるが大学1年生からの積極的な応募があったことも考慮すると、総じて国際開発分野での活躍に対して意識の高い参加者が集まったと言える。

※ 参加者所属大学

愛知県立大学、青山学院大学、大阪大学、京都大学、慶応義塾大学、埼玉大学、静岡大学、首都大学東京、上智大学、中央大学、筑波大学、都留文科大学、東京農業大学、東京医療保健大学、東京大学、東京女子大学、東京医科歯科大学、東洋大学、鳥取大学、名古屋大学、南山大学、日本大学、広島大学、明治大学、横浜国立大学、立命館アジア太平洋大学(五十音順)

(佐藤・多嘉良)

2 全体スケジュール

Day 1

開会式・チーム発表

基調講演

アイスブレイク

目標設定

セルフマネジメント講座

コミュニケーション講座

テーマ別座談会

プランニング



初日。日本各地から集まった参加者47名は10チームに分かれる。全員が初対面というメンバーでこれから濃い3日間を共にすることになる。いかに早く、互いを理解し合えるかが、チームワークを生む一つの鍵となる。そのために重要なことが『アイスブレイク』と『目標設定』である。『目標設定』では参加者全員がidpc2009へ参加した目的をチームで共有する。チーム結成後は『セルフマネジメント講座』や『コミュニケーション講座』等の講義を受け、プランニングに備える。

Day 2

2日目。いよいよ『プランニング』に本格的に取り組む。まずは与えられた課題をよく理解し、プランの枠組みを決めることになる。午後には各チームその時点でのプランを審査員にプレゼンし、アドバイスをいただく『中間発表』を行う。ここでのアドバイスが今後のプランニングを左右する。的確な助言をいただくために、何を伝え、何を尋ねたいのかをしっかりとめることが要求される。この日は、多くのチームが夜通し議論を続けた。



プランニング

キャリアアップ講座

中間発表

プランニング

Day 3



プランニング

最終発表

結果発表

フィードバック

Speaker's Corner

閉会式

最終日。『最終発表』では、3日間かけて作り上げたプランを他チーム、審査員へ発表する。『結果発表』で順位が決まるが、大切なのは結果ではなく3日間で何を学んだのかである。『フィードバック』ではチームメイト同士、お互いの改善点や良い部分などを正直に話し合う。『Speaker's Corner』では参加者が1分間で胸に秘めた熱い想いを語り、idpc2009は幕を閉じた。

3 プランニング

プランニング

HIV感染率の上昇、舗装されていない道路、小学校を卒業できない子供たち、不安定な電力供給、市場に左右される農業収入など、様々な問題が山積しているのが今回のプロジェクトサイト、仮想の小都市Tambo。

参加者は、Tamboに関する2000語弱の英文によるケースレポートを読んだ上で、5人1組のチームに分かれ、当地の開発課題の優先順位づけ、さらに、最も優先度が高い課題を解決するためのプラン作りをおこなった。プラン策定の際に使用できるリソースは、以下のうち二つのみとした。

- ・携帯電話30台
- ・大型車両5台+燃料費
- ・パソコン10台とインターネットコネクション
- ・一つの食材を加工する機械+トラック1台
- ・エイズの治療薬 (ARV) を年間3000人分
- ・日本のデパートで購入可能なもの (30万円相当)

各チーム、当地が5年後、10年後、どのようなコミュニティになるべきか、というビジョンを描いた上で、最優先課題を解決すべく、夜遅くまでディスカッションを戦わせた。

なお、深夜2時まで企画局ブースを設け、参加者からの質問対応を行った。ルール上の不明な点を明らかにするために利用することはもちろん、Tamboの情報を収集するためのフィールドワークの一環として活用するチームも多数あった。ブースを閉じた深夜2時ぎりぎりまで、入れ替わりで様々なチームが質問のために来室し、真剣に取り組む様子が見て取れた。



中間発表

17日13時より審査員を招き中間発表会を行った。各チームに与えられた時間は15分。それまでのディスカッションの流れを発表し、審査員からのアドバイスを受けた。

中間発表は、審査員からアドバイスを受ける、ということも、チームの思考整理を行い、そのあとのディスカッションの道筋をはっきりさせることを目的とした。中間発表でディスカッションの方針の建て直しを行い、最終発表に良い形でつなげた班も少なくなかった。

今回は、プレゼンテーションの出来も評価項目に入るため、比較的多くの班が、中間発表の段階から、最終発表を意識し、いかに伝えたいことを効果的に、そして論理的に伝えるか、という視点をもって発表を行っていた。

審査員

小泉純氏

コトバンク株式会社代表取締役

坂部有佳子氏

内閣府国際平和協力本部事務局研究員

谷口諭氏

コトバンク株式会社取締役

外山聖子氏

ビジネス・ブレークスルーポンド大学大学院事務局勤務



最終発表

18日10時より国際会議場で最終発表を行った。大きな会場である上、7名の審査員、さらには当日見学者にもご来場いただいたため、それまでとは明らかに違う雰囲気、緊張の面持ちの参加者も。それでも、(眠い目を必死でこすりながら、)二晩かけたディスカッションの成果を十二分にプレゼンテーションし、審査員からの質問にも、丁寧に、かつしっかりと回答をしている参加者の姿が印象的だった。

各チームに与えられた発表時間は7分。短い時間ではあるが、きちんと準備し、上手に時間を使っているチームが多くあった。短い時間で伝えたいことを伝えたい相手にしっかりと伝えることの重要性を参加者は感じたようだった。

来場いただいた審査員からは、「学生の自由な発想を聞いていて面白かった」「私のほうが勉強になった」などの声を頂くことができた。

審査員

畔上直也氏

アイ・シー・ネット株式会社経営管理部副部長

江上由里子氏

国立国際医療センター国際医療協力局

元世界保健機関/パキスタン事務所勤務

奥本将勝氏

独立行政法人国際協力機構人間開発部

高等教育・社会保障グループ

黒田康之氏

財団法人国際開発センター主任研究員

二見武氏

元国際児童基金職員

明城徹也氏

NPO法人ピース・ウィンズ・ジャパン統括責任者

渡辺淳一氏

財団法人国際開発センター主任研究員

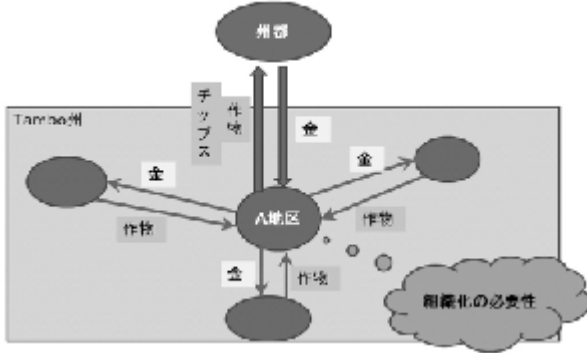


(井上)

4 プラン紹介

第1位 E: チップスキー

Tambo州における農業活性化プロジェクト



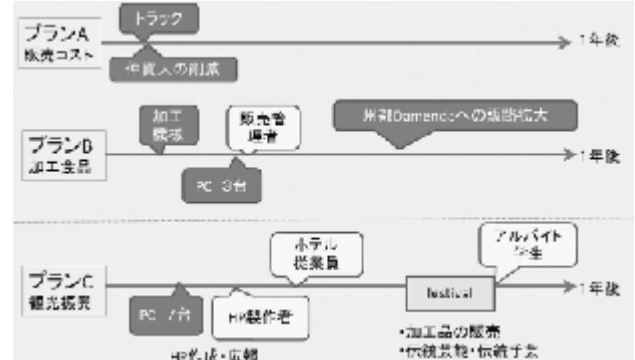
Tamboにふんだんにある農作物を、長期保存可能で、運送が容易なTamboチップスにする。各農作物の収穫スケジュールにあわせ生産し、農家が安定した収入を確保することを目指した。運営の効率化や農家同士の情報共有を可能にするため、組合を設立することもプロジェクトの特色のひとつである。



MEMBER
浅野 大志 内海 貴啓
高原 明子 松田 協子
樋口 裕城

第2位 G: コシヒカリ

Tamboの持続発展のために



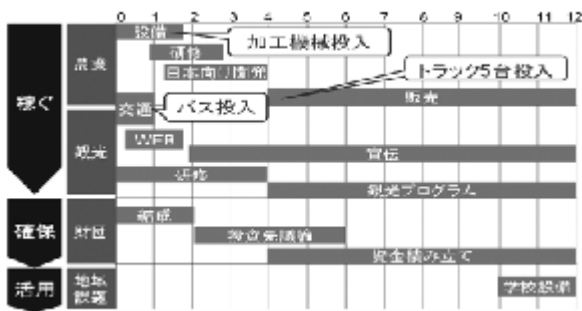
農業・非農業部門双方の確立で、自然条件への依存から脱却する。農業では、生産者が作物を市場に直送することで販売コスト削減を、また余剰生産物を保存食に加工することで、インターネットを通じた販路拡大を図る。非農業では観光振興のため、トラックで交通の便を改善し、HPで広報を強化する。



MEMBER
青木 拓也 井口 沙央里
長山 悦子 誉田 有里
間橋 大地

第3位 J: JJ

! Tambo プロジェクト～つながる喜びを人々に～



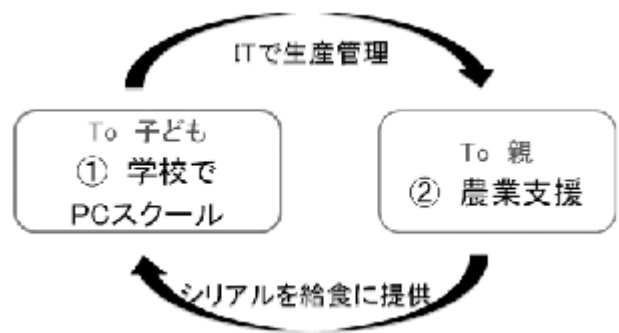
Tamboの強みを自社の強みであるIT技術で収入増に繋げ、その増収分を積み立てる財団を設立することで、投資の必要な地域課題の解決を目指す。収入向上策はインターネットを用い、農業では現地農産物のブランドおよび販売網を確立し、観光業では観光資源およびアクセスの改善をアピールする。



MEMBER
大垣 俊朗 奈良 悠子
沼倉 有沙 松田 麻美

審査員特別賞 I: LOVE

For the future project



子どもが笑顔で暮らし、将来の仕事が選べる社会にする。長期的な通学環境を整えるため、PC授業の導入により職業選択の幅を広げ、親の理解を促す。さらに、農産物を保存可能なシリアルに加工して新規市場を開拓し、家計を安定させる。また、同時に翌年の指導役を育成しシステムの持続を図る。



MEMBER
旭 紗知 井坂 紗織
高橋 ブレーノ 峰崎 泰昌
若林 英里

H：切り込み隊長

Tamboの開発プラン

産業の活性化による生活水準の向上を目指し、輸送会社をつくり農業と観光業における輸送問題を解決する。農業では輸送コスト削減のため、輸送会社による一括輸送システムを確立する。さらにHPで生産状況を書き、消費者の利便性を上げることで増収を図る。観光業では集客と運行収入の確保のため、交通アクセスを整備する。



MEMBER
小田 桐 慧 鈴木 輝美
斉 瑤 野瀬 雄太
村瀬 峻史

F：バナANGO

Tamboの実りを皆のもとへ～ショッピングサイト構築プラン～

収入の低さに起因する諸問題を解決する準備段階として、一年間で就学と雇用の機会を増やす。ショッピングサイトを構築し、先進国から得られる売上の10%を奨学金にすることで就学率上昇を、残り90%を生産者への報酬とすることで雇用機会の創出を図る。商品はTamboの特産品のほか、景観を生かしてポストカードを販売する。



MEMBER
大川内 桃子 城戸 大輔
田村 康一郎 藤井 友香
宮本 瑛

D：DoライマANGO

peal paper project ～タンボから始める循環社会～

持続発展のできる社会を目指す。パナナの皮起源の紙製品による地域循環システムを確立することで、農業従事者の増収だけでなく、二次産業による新規雇用を生み出す。同時に新たな教育が必要になるため、児童労働の削減も見込める。紙資源の需要の高さや、廃棄物の再利用によるコストの低さなどから実現可能性も期待できる。



MEMBER
岩寄 絵莉子 金本 和也
隅屋 輝佳 森島 聖

B：ふぁ～すと・すてっば

TamboにおけるCSRプロジェクト

経済的・健康的に自立したコミュニティを目指す。農産物販促プロジェクトによる利益の一部を積み立て、産業振興や道路整備、教育分野へ投資する。プロジェクトでは、豊富な農作物を加工して付加価値の高い商品を開発するほか、都市部への販路拡大を図る。所得向上の達成度は平均所得や物価指数などから指標を算出して測る。



MEMBER
秋山 香織 清水 淳一
竹田 孝紀 羽田野 真帆
肥田 優子

A：東京ずんだもち

可能性を拓く開発

現金収入を増やすことで、生き方を選べる生活を目指す。バス・観光会社を設立し、広告収入で低運賃バスを運行させ、アクセス改善による市場拡大や観光促進を図る。またIT教育を行い、バス会社の運営や村の広報に活用する。増収分で化学肥料や農具を購入することで生産量を増やし、長期的な現金収入サイクルを構築する。



MEMBER
安藤 加里菜 石田 ともみ
井上 沙聡 岡部 慧志
萩原 裕一郎

C：おっさんはまずいやろ

クローズアップ未来

外貨獲得による財源確保のため、伝統文化などTambo特有の観光資源を生かしたツアープランを企画する。プランは海外の既存のツアーを参考に練り、インターネットを通じて海外の旅行会社に売り込む。こうして得られた財源を就学補助やHIV対策に充てて労働力を確保することで、観光業・財源・教育という三要素の好循環を創出する。



MEMBER
何 璐丹 小林 萌子
前田 礼二 若松 万里子

5 講演・講座

基調講演

「これからの国際協力に必要な人材とは」 紀谷 昌彦



■ 講義概要

開発分野で求められる素質と心構えを7つの要素に分類してお話しいただいた。idpc2009の参加基準は「将来、開発分野で貢献することを希望する人」となっており、参加者の多くは開発分野でのキャリア形成に興味がある。しかし、実際に開発分野でのキャリア形成は多様であり、どのような道を進めば活躍できるか、どのような価値観を持

つべきか、知ることは難しい。その難題に、ご自身の経験に基づき、「明確な夢を持つこと」といった価値観的要素から、「人的ネットワークの形成」「専門性を考えるときの考慮点」など技術的要素を提案された。講演中にメモを取る参加者が多く見られるなど、お話の有意義さとともに開発分野のキャリアに関する興味深さが窺えた。(水越)

lecturer

紀谷 昌彦 (きや・まさひこ)

外務省総合外交政策局国連企画調整課長。東京大学法学部卒業、英国ケンブリッジ大学修士課程修了(国際関係論、国際法)。1987年外務省入省後、国連局、在ナイジェリア大使館、防衛庁防衛局、外務省欧亜局、大臣官房、経済局に勤務。2000年より在米国大使館で開発・環境問題を担当。2003年より在バングラデシュ大使館で開発援助の現地機能強化を推進。2006年4月より外務省総合外交政策局国際平和協力室長として国連PKO参加と平和構築人材育成を推進。2008年8月より現職で国連企画・広報・行財政・人事・選挙を担当。

参加者の声

- ◆ 国連関係に進む際の必要な能力がわかった。
- ◆ 国際人になるための心得を学ぶことができた。
- ◆ 自分の思っていたこと、考えていたことが肯定されて自信をもつことができた。



セルフマネジメント講座

「国際人になるための——「自己実現」の秘訣 ～Self-management Thinking～」 山岸 和実



■ 講義概要

セルフマネジメントとは、行う対象が主婦であるか学生であるかは関係なく、どんな人にとっても重要なものである。国際開発の現場も含め、あらゆるプロフェッショナルは常に自分と闘っている。なにか成果を生み出したいと考えるときに、セルフマネジメントは必要不可欠である。各個人の持つ「心」は、技術や知識に比べてはるかに優位性がある。成果が生み出され

やすいときは「心」と技術と知識が重なり合うときである。そして、その3つの要素が重なり合うように我々が心がけることは、すなわち想像力を駆使することである。想像力は持つか、持たないかという話ではない。潜在能力で既に手にしている。それを意識的に働かせているか、そうでないかが違う。もっと意識的に自覚して働かせることが重要なのである。(北川)

lecturer

山岸 和実 (やまぎし・かずみ)

(有)イマジネーション・クリエイティブ取締役。学生時代に実演スタイルの接客・販売の世界で「売上記録」を叩き出す一方、新人スタッフの育成も手がけ、プロを輩出。ジャーナリストとして活動後、人材マネジメント会社などを経て現職。



参加者の声

- ◆ セルフマネジメントに触れることのできる最高の機会でした。
- ◆ 理想を実現するには、プロセスからイメージする必要があることが分かった。

キャリアアップ講座

「本当に意味のある国際協力をするためには」

山本 敏晴



■ 講義概要

世界の現状を取り上げ、生々しくも知っておくべき事実を、現場での写真をふんだんに交え講演していただいた。

内容は後発国の環境、医療、紛争と幅は広範囲にわたったが、どれも国際開発には切っ

ても切り離せない分野ばかりだった。さらに、それらはすべて山本氏が世界でボランティア活動中に見て、聞いて、感じた事柄であった。そのため、普段大学の授業で聞くような抽象的な講義と違い具体的で、実感として感じやすく、非常に新鮮な講演であった。講演終了後には多くの参加者が山本氏のもとへ質問に行き、関心の高さが窺えた。(水越)

lecturer

山本 敏晴 (やまもと・としはる)

NPO法人宇宙船地球号事務局長。医師、写真家。「本当に意味のある国際協力」を目指し、最前線40カ国以上でプロジェクトを行う。また、日本でも企業によるCSRや、消費者の買い物方法についての啓発を行っている。

参加者の声

- ◆非常に面白く、刺激的な内容のレクチャーだった。
- ◆本の中でしか知らない山本さんの話を実際に聞いて新たな視点を持てた。
- ◆地球規模で物事が考えられるようになった。

コミュニケーション講座

「効果的なプレゼンテーション」

藤沢 烈



■ 講義概要

プレゼンテーションで大切なこととは、自分がなにを話したいかではない。相手が何を聴きたいのかである。この二つの間のギャップこそが重要であり、このギャップを埋めることがプレゼンテーションの内容である。まずは相手の知らないこと、こちら側に期待していることを書く。その際、相手がどこまで分かっ

ているのか把握しておくことも重要である。だが、プレゼンテーションはテクニックだけで決まるのではない。なぜプレゼンをするのか考えることも大切である。国際社会において、日本人としてプレゼンをするということがどういうことなのか。その意味を考え、理解しない限りはどんなにテクニックがあろうとそのプレゼンテーションは弱いものになってしまうだろう。(北川)

lecturer

藤沢 烈 (ふじさわ・れつ)

株式会社RCF代表取締役社長。一橋大学卒業後、飲食店経営、マッキンゼー社コンサルタントを経て独立。「世界に通用する経営者をうみだす」ための創業支援事業を展開。BlogURL <http://retz.seesaa.net/>

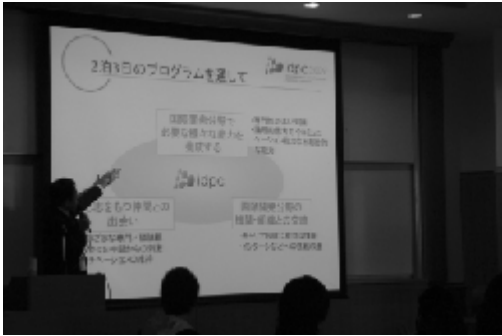
参加者の声

- ◆若い人たちを応援したいと熱いメッセージをくださったことがうれしかった。
- ◆自分自身これからプレゼンをする機会が増えるためとても参考になった。

6 その他のコンテンツ

開会式

緊張感漂う空気の中、Opening Movieで開幕。代表挨拶や、各プログラムの意図の確認を行った。(伏見)



▲ 改めてコンテストの大枠を確認。



▲ ゲーム開始。ちらほら笑顔も見える。
▼ 盛り上がり楽しそうに話すチーム。

アイスブレイク

自己紹介を兼ねて、チーム内で第一印象を伝えるゲームをした。初対面のメンバーが互いに先入観以外の人物像を確認し合い、打ち解けるきっかけとなった。(岩本)



目標設定

短い日程の中で確実に成長できるよう、初日に「3日間で何をしたいのか」を考え、目標を設定した。さらにチーム内でそれを共有した。参加者からは「チームメイトがどのような想いで参加しているのか知ることが出来てよかった」との声を頂いた。(真鍋)



▲ 個々の目標をチーム内で共有。

◀ まずは各自、自分の目標を整理。

テーマ別座談会

参加者同士の交流を促すため、80分間の座談会をおこなった。テーマは参加者の研究発表から国際開発分野でのキャリア形成まで様々で、各自関心のあるテーマに参加した。キャリア形成のグループでは泉泰雄氏をお招きし、多くの参加者が集まった。どのグループでも積極的な発言が見られた。(水越)



▲ こちらは少人数で和やかムード。



◀ 参加者最多の研究発表。質問も多数。



guest

泉 泰雄 氏

国際基督教大学卒業、日本興業銀行を経て国際機関勤務。東欧諸国にて国家レベルのアドバイザーとして活躍する傍ら、神戸大学客員教授も勤める。

結果発表

約1時間の審査を経て、入賞チームを発表。1～3位に加え、審査員の方々の意向を受け急遽「審査員特別賞」も設けた。(伏見)



▲ 審査員の方から直接講評を頂く。



フィードバック

- ▲ お互いに書いたものを読み合う。
- ▼ スタッフからもアドバイス。

3日間の中で得た気づきの共有、および自身の客観的な評価の把握のため、チームメイトの良い点・改善点を正直に伝え合う場を設けた。このような機会は貴重であるためか、どのチームでも仲間の意見に懸命に耳を傾ける姿勢が見えた。(真鍋)



Speaker's Corner

Speaker's Cornerでは、大勢の前に立ち、1分間で自分の伝えたいことを簡潔に、わかりやすく伝えるスピーチを行った。当日は参加者25名とスタッフ6名がスピーチをし、時間内にスピーチをおさめる難しさを感じながらも、3日間の感想や個々の将来を熱く語った。(佐藤)



閉会式

審査員総評を頂き、代表挨拶でこれまでの振り返り、id-
pc2009は閉幕した。(伏見)



▶ 審査員の畔上様より総評を頂く。

7 アンケート分析

idpc2009の参加者、延べ47名に対し、今回のイベントに関するアンケート調査を行った。
意見・感想を尋ねた項目は大きく分けて以下の3つである。

- ⇒ 各コンテンツの内容
- ⇒ メインとなるプランニング
- ⇒ idpc2009の主旨・目的(スキルの理解、仲間との交流、国際開発業界の方との交流)

各コンテンツ

最も参加者が有意義であったと答えたコンテンツは、プランニングの「最終発表」であった。緊張感漂う中での発表、専門家によるフィードバック、などが参加者にとって良い経験となったようだ。初日に行った「プレゼン講座」への票も多く、それが最終発表に対する意気込みにさらに拍車をかける結果となった。基本的に講演・講座系のコンテンツに対する満足度は高く、プランニングの合間にこのようなコンテンツを交えたことが、うまく参加者のニーズとマッチングしたと言える。

プランニング

プランニングの内容に関しては、「設定条件の範囲がやや広い」という声が多数あり、そのことが参加者の頭を悩ませたようだ。前述の理由から、ケースに関して「取り組みにくい」という意見もあったが、「逆に取り組みやすかった」または、「想像力が掻きたてられ良かった」という意見もあり、問題設定や難易度に関してはある程度適切なものだったと考えられる。お招きした審査員のアドバイスに関しては、ほぼ全員が「参考になった」と答え、人選に関してもほぼ全員が「満足」「まあ満足」と答えた。

主旨・目的

今回のイベントを通して、「国際開発分野において必要なスキルを学べたか」「チーム内の仲間との交流は十分だったか」「専門家の方々との交流は十分だったか」の問いには、それぞれ「そう思う」「まあそう思う」と答えた参加者が全体の7割強を占めた。ただし、「参加者全体での交流が不十分だ」と答えた参加者も全体の7割程度おり、チーム外の参加者との交流を如何に充実させるかが今後の課題の1つとして残った。

全体

最後に、イベント全体の感想はどうだったのか。「コンテストは全体を通して期待に沿うものだったか」の問いにほぼ全員の参加者が「そう思う」「まあそう思う」と答えている。全体としては概ね参加者の期待に応えられたようだ。しかし、「メールによる事前情報の配信が遅い」「配信内容に関するミスが目立つ」「スケジュールがタイトすぎる(睡眠時間がとれない)」「参加者間の事前交流する機会があっても良かったのでは」など参加者から指摘を受ける点も多数あり、これらは来年度さらに質の高いコンテストを提供するために今後改善してゆく必要がある。

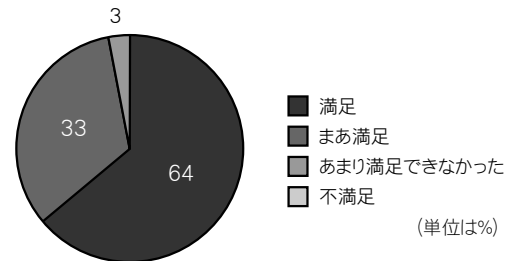


図1 審査員の人選はどうだったか

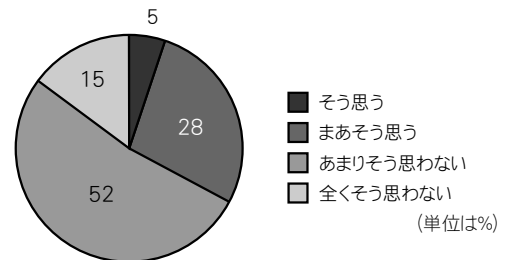


図2 チーム外の参加者との交流は十分だったか

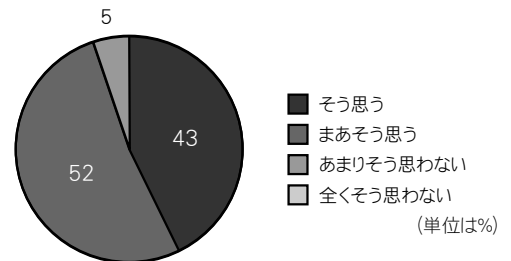


図3 コンテストは全体を通して期待に沿うものだったか

(多嘉良)

1 主催団体

団体概要

idpc2009を主催する国際開発プランニングコンテスト実行委員会の概要は、右上図の通りである。右下図のような組織形態を構成しているが、各局とも少人数であるため、必要に応じ局を超えて積極的に業務をシェアしている。

スタッフの学年は、学部一年次から修士課程一年まで広く在籍し、専攻分野も国際協力そのものに限らず、環境科学、看護学、法学、経済学、教育学、工学など多岐にわたる。

活動は都内で週に一度行うミーティングを中心とし、メールで情報交換を補完している。その他には、講師や協賛企業との交渉、プランニングのケース課題作成、参加者募集の宣伝活動などが主な業務となる。

正式名称 国際開発プランニングコンテスト実行委員会(略称:idpc)
 創 立 2008年4月28日
 スタッフ数 16人
 代 表 者 真鍋希代嗣(東京大学大学院 新領域創成科学研究科国際協力学専攻 修士課程)
 団体連絡先 URL : http://idpc.in E-mail : info@idpc.in
 所 属 大 学 青山学院大学、慶應義塾大学、首都大学東京、成城大学、専修大学、千里金蘭大学、中京大学、筑波大学、東京大学、法政大学、横浜市立大学、早稲田大学

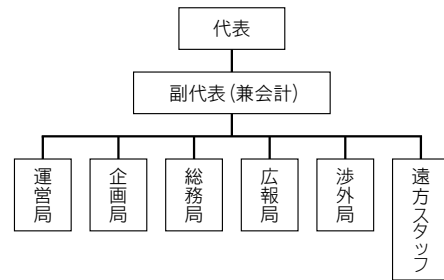


図 国際開発プランニングコンテスト実行委員会 組織図

年間の活動

弊委員会の活動概要は以下のとおりである。4月28日の発足からコンテスト開催の翌2月、そして反省会や報告書作成を行った3月まで、約1年に及び活動してきたことになる。活動期間はその内容から、大きく3つに分けられよう。

準備期間前期 4～9月

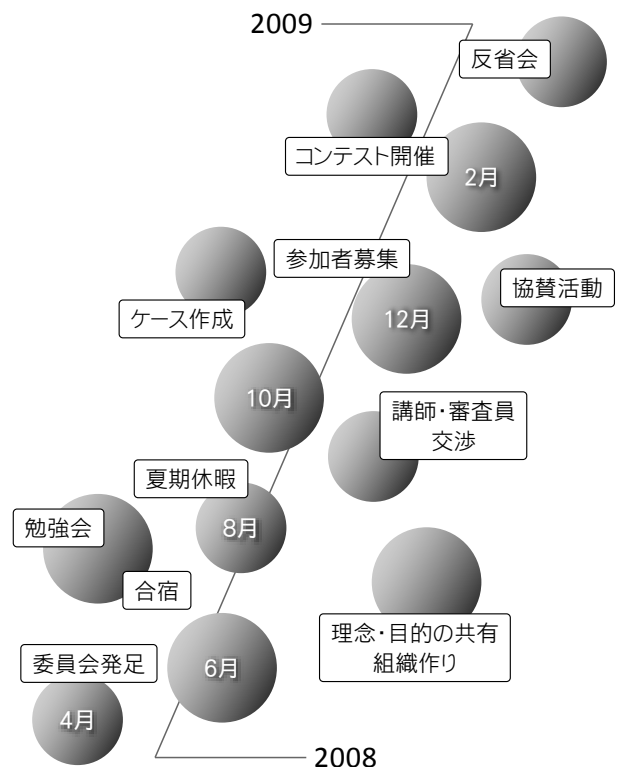
この時期は委員会が発足し、組織の形態作りや、自分たち自身の国際開発の勉強会などが活動の中心であった。コンテストの具体的な中身よりは、その目的や企画の対象とする層などの話に時間を費やした。

準備期間後期 10～2月

参加者の募集や、講師・審査員との交渉などが本格化し出し、それと並行してコンテストの中身も具体化していった。企業にコンテストの意義が認められ、協賛を得られるようになったのはこの頃からである。2月にいよいよ本番を迎え、スタッフは精神的・体力的な限界を超えながらも、コンテストのタイムテーブルや資料作りに励んだ。

活動総括期 3月

コンテスト後は、報告書(弊冊子)作成、および来年に向けての反省会が主な活動であった。



スタッフ紹介

代表	真鍋 希代嗣 (全体統括)	総務局 局長	北川 美佐 (参加者対応、受付)	渉外局	木下 幸太郎 (受付、懇親会)
副代表・会計	勝 ひとみ (受付、機材操作)	総務局	水越 健介 (座談会・懇親会統括)	渉外局	寺田 沙恵 (タイムキーパー)
運営局 局長	佐藤 淳 (運営統括)	広報局	伏見 千絵 (撮影)	遠方スタッフ	岩本 聡美 (司会)
運営局	柴田 堯 (運営統括)	渉外局 局長	中村 麻衣子 (ゲスト対応)	遠方スタッフ	諸田 滋子 (機材操作) ※当日のみ
企画局 局長	井上 陽介 (プランニング対応)	渉外局	梅津 薫 (ゲスト対応)		
企画局	渡邊 皓亮 (プランニング対応)	渉外局	多嘉良 佑介 (映像制作)		

()内はコンテスト当日の担当業務

2 活動詳細

理念・目的の共有



弊委員会の理念は「国内における国際開発分野を活性化するために、国際開発の分野で活躍できる人材の育成に貢献する」ことである。そしてコンテストの目的は、参加者に(1)国際開発分野で必要な様々な能力を養成する場、(2)同じ志をもつ仲間との出会いの場、そして(3)国際開発分野の機関・組織との交流の場を提供することである。この理念と目的は一朝一夕に決まったわけではない。

委員会が発足してから最初の仕事は組織作りであった。そのためにはまず団体の行動指針となる団体理念及びコンテストの目的を明確にし、共有し合う必要があった。2008年4月から始めた話し合いはなかなか合意に至らず、スタッフの自宅合宿などを経て、最終的に団体理念とコンテストの目的が文章化されたのは11月であった。多くの時間を費やしはしたが、理念と目的は、それ以降idpcの絶対的な指針となったため、スタッフが納得のゆくまで話し合った功績は大きかった。(真鍋)

idpcスタッフは結成直後から、ほぼ毎週1回の定期ミーティングを続けてきた。ミーティングは基本的に、以下の内容で行った。

【日時・頻度】毎週火曜日 18:00～22:00

【場所】東京都内 メンバー所属大学など

【アジェンダ】

各局一週間の活動進捗・今後の予定報告、全体に関わる事項の方針議論、各議題担当者の個別打合せ

前半期には、各スタッフ持ち回りでの開発に関する発表、idpc2009の理念・目標設定に多くの時間を割き、全体での意識の共有を図った。

後半期には、主に各局のタスクの報告・確認を行い、コンテスト本番の運営準備を進めてきた。(勝)

定期ミーティング



模擬コンテスト

コンテスト当日のリハーサルとして、全4回の模擬コンテストを行った。

スタッフがチームに分かれ、実際に企画局の作成したケースのプランニングに、夜通し取り組み組んだ。プレゼンテーションには審査員をお招きし、各プランおよびケース自体に対し評価をして頂いた。

当日使用する会場で、当日を想定したタイムテーブルに従い、身をもって経験することで改善点が明確になった。また、そこから得られるフィードバックは、コンテストをより質の高いものとして参加者に提供するうえで、非常に有意義であった。

各回の実施に間隔を空け、ケースや運営を練り直す時間を十分に取ったため、回を重ねるごとに目指す形に近づけていくことができた。(岩本)

スタッフ自身の国際開発に関する知識や、プレゼンテーション能力の向上を目的として勉強会を行った。

4月から8月にかけては各自が国際開発分野の中から1つテーマを選び、他のスタッフへプレゼンテーションを行った。テーマとしてはジェンダー、国際保健など様々であった。この勉強会を通してスタッフでの国際開発に関する知識の共有や、人前での話し方等

課題や問題点を発見し、コンテストに生かしていくことを目指した。

9月以降の勉強会では、主にディスカッション形式で開発に関して様々な意見を交わした。その中では課題図書も指定し、より密度

の濃い勉強会が出来るよう努めた。

前期・後期の勉強会を通して、スタッフ間での国際開発に関する知識や、開発に携わるなら不可欠であろうプレゼンテーション能力も、多少なりとも身についたように感じる。(北川)

勉強会

ケース課題作成

▼ケースメソッドの採用

idpcが発足した当時に決まっていたことは、「国際開発に関するプランニングコンテストを実施する」ということのみだった。しかし、参加者にとって一番の学びになる形式を考えたとき、ケースメソッドを採用することが最適解であるように自ずから思えた。欧米のビジネススクールやメディカルスクールで、また、学生を対象としたビジネスプランコンテストで、ケースメソッドが採用されていることは知っていた。せつかく50名もの参加者が一ヶ所に集い、時間・空間をシェアをするのである。国際開

発の現場からかけ離れた抽象論を話したり、「途上国の子供はかわいそう」と感情的に叫びあうことに利用するのでは、あまりにも勿体無いと感じた。そもそも、その行為に私は意義を見出せなかった。国際開発の現場で起こっている現状を踏まえ討論するのでなければ、国際開発分野で活躍する人材育成にはつながらず、私にはそう思えたのだ。

▼ケースの作成

ケースメソッドを採用することにしたはいいものの、いざ作成する段になって、どのように作成してよいものやらまったくわからなかった。しかも、参加者の中には、専門分野にも知識レベルにも、バラつきがあることが予想されたので、活発なディスカッションを引き出

すことに、困難が伴うことは明白だった。とはいえ、ディスカッションの盛り上がりの如何は、idpc全体の満足度に大きく影響するのは必至であるから、妥協もできず、いくつかの参考資料に当たりながらケースを作成し、そしてブラッシュアップを繰り返し行った。スタッフに解いてもらったケースは全部で3つである。少数民族の伝統織物技術を日本でどのように活かすか考えるケース。あるコミュニティにおけるエイズ対策の問題点を構造的に理解するケース。そして、カメルーンの小都市クンボの問題を解決するケースである。結局、一番解きやすいというスタッフからの反応があり、また私自身も作成に当たっての知識が一番あったカメルーンのケースを採用することとした。(井上)

広報活動

広報活動は大きく「スタッフ募集」「参加者募集」「報告書作成」の3つに分けられる。主業務となる「参加者募集」は媒体別に、さらに以下のように分けることができる。

1) インターネット

主に利用したツールは、idpc2009公式サイト、各種団体のメーリングリスト、SNS (mixiなど)、外部サイト掲示板である。

2) ポスター

関東・関西の主要な大学学内にポスターを貼付した。

3) 外部イベントまわり

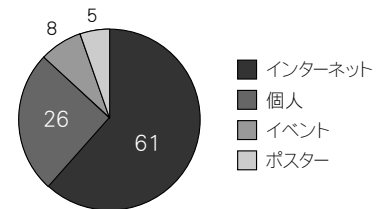
関東・関西の主要な大学の学園祭や、国際

訪問先別フライヤー配布枚数

枚数	訪問先
130	早稲田大学
120	模擬国連国立・四ツ谷・日吉・駒場研究会
90	第13回キッカケサミット
80	東京外国語大学
70	東京大学
60	上智大学
50	Cafe de Global Cooperation 第1回
40	明治大学
30	慶應義塾大学
20	京都大学

協力に興味を持つ学生・社会人が集まる交流会などに参加し、コンテスト開催の告知を行った(上表)。

この告知媒体の妥当性を確かめるため、参



参加者アンケート「コンテストをどこで知りましたか？」
(有効回答37/43 自由記述 複数回答 単位は%)

加者にアンケートをとった(上図)。インターネットが最も有力で、全体の約6割を占めたほか、全ての媒体で効果が窺えた。なお、グラフ中の「個人」とは、スタッフが友人・知人に個人的に呼びかけたものである。また、応募総数も定員50名に対し84名あり、十分に効果があったと言える。(伏見)

協賛活動

コンテストをより質の高い、充実したものにするため、企業や各種団体の方々に資金・人材・物品面で協力をお願いした。

活動当初は渉外の要領が分からず、手当たり次第ご協力をお願いした結果、全く相手にされないことが多々あった。また学生団体に

よるイベントが数多く存在する昨今、「過去に実績がない」ということは交渉の際、非常にネックになった。

渉外活動を繰り返し、日々検討を重ねていくうちに、相手の「心」を動かそうとしている自分自身が、そもそも何故idpc2009の活動に共感をし「心」を動かされたのかに立ち返るようになった。

これが転機となり、各渉外担当が、各々の

言葉で活動協力に至るまでのストーリーを交渉に織り交ぜるようになったことで、多くの企業や団体の方々から共感していただけるようになった。

このような渉外活動を経て、コンテストに必要な資金・人材・物品、そして多くの方の「想い」を携え、コンテスト本番を迎えることができた。(中村)

3 決算報告

支出

コンテスト開催費

施設費	宿泊費	¥151,800
	会場費	¥81,560
食費		¥166,000
講師関連費	謝礼費	¥93,000
	飲食費	¥11,417
資料作成費	用紙	¥3,420
	印刷	¥17,860
消耗備品		¥31,901
運営備品		¥21,362

広報関連費

ロゴデザイン費		¥5,000
参加者募集費	A4用紙	¥10,280
WEB管理費	サーバー管理費	¥6,135
	メールアカウント料	¥2,250
名刺作成費		¥3,280
報告書作成費		¥7,220

渉外関連費

交通費		¥70,000
郵送費		¥5,000
イベント参加費		¥50,000
通信費		¥20,000

諸費

銀行手数料		¥1,365
-------	--	--------

支出計 ¥758,850

収入

参加費	参加者	¥450,000
	スタッフ	¥77,300

協賛 ¥340,000

収入計 ¥867,300

4 協賛・協力

協賛

株式会社公文教育研究会様
株式会社ジースタイル様
扶桑法務事務所様
株式会社毎日エデュケーション様
財団法人生涯学習開発財団様
Knowledge Solutions Group様

物品協賛

有限会社イマジネーション・クリエイティブ様
「接客のルール」「マンガで読む接客のルール」「ジブン「発見」ノート」ご献本
味の素株式会社様
清涼飲料水「アミノバイタル」ご提供

協力

特定非営利活動法人アフリカ日本協議会様
特定非営利活動法人オックスファム・ジャパン様
4s+ (クワトロエスプラス) 様

後援

JICA地球ひろば様

メッセージ

緒方貞子 様 (独立行政法人国際協力機構 理事長)

今私たちの生きる世界は相互依存によって成り立っています。紛争、テロ、貧困、感染症、そして金融危機と、先進国、途上国共に、実に様々な脅威の元凶となり、あるいはその脅威に直面しています。これらの脅威に対処し、安定と繁栄を享受できる世界を築くためには、相互依存の現実を正確に認識した上で、内を向きがちな日本から世界に目を向けて解決策を見つけ出す力とそれを実行に移す行動力が必要です。

国際協力を志して問題意識を持つ仲間と討議を重ねることは、皆さんにとって貴重な経験となることでしょう。皆さんが、次世代を担う真の国際人となられることを応援しています。

緒方 貞子

Special Thanks

(株)ブレインワークス 近藤昇 様 渡利周司 様 / (株)キャプテン 出崎克 様 中山裕登 様 / (有)イマジネーション・クリエイティブ 方喰正彰 様 / NPO法人スプリングウォーター 金田浩邦 様 春日博文 様 / NPO法人アフリカ日本協議会 斉藤龍一郎 様 / (株)コーチ・トゥエンティワン 五十嵐朝青 様 / NPO法人ジャパ・プラットフォーム 桑名恵 様 / NPO法人オックスファム・ジャパン 米良彰子 様 / NPO法人ETIC 高野愛 様 / 国立国際医療センター国際医療協力局 仲佐保 様 / 東京大学大学院医学系研究科 洗井優 様 / 独立行政法人国際協力機構 井上建 様 / 世界銀行東京事務所 岩崎弥佳 様 / (株)オルタナ 森撰 様 加藤枝梨 様 / NAVTI FOUNDATION NGOの皆様 / カメルーン北西部州クンガの皆様 / (株)ニー 金田紗季 様 / 学習院大学法学部政治学科4年 鈴木洋一 様 / 早稲田政治経済学部2年 梶原大試 様 / 慶應義塾大学経済学部2年 坪井惇 様 / 筑波大学理工学群化学類2年 河瀬航大 様 / 埼玉大学経済学部社会環境設計学科2年 渡邊宏明 様 (所属は2009年3月現在)



国際実務と法務のプロ

扶桑法務事務所



A taste of the future.
AJINOMOTO®